

COOP

京都の生協

C/O/N/T/E/N/T/S

生協と共同作業所の明日へ

ネットワークNOW ----- 2

- 共同作業所第22回全国大会実行委員会委員長 岩崎 彰之助^{さん}
- 共同作業所第22回全国大会実行委員会副委員長 京都共作連会長 栗津 浩一^{さん}
- 京都府生活協同組合連合会会長理事 共同作業所第22回全国大会実行委員会副委員長 吉田智道^{さん}
- 京都府生活協同組合連合会副会長理事 京都生活協同組合理事長 末川 千穂子^{さん}

- ノーマライゼーションを地域のすみずみに 9
- わたしたちに働く場をください 10
- 生協といこいの村との交流を通して 11
- TOPICS ----- 12

- ◆JA京都女性協と懇談
- ◆ホームヘルパー2級講座修了式
- ◆訪問看護ステーションを開設
- ◆新個配「こっこ便」がスタート
- ◆いつまでもこの町に住みつづけたい
- ◆京都のマスコミ関係者・月曜会と懇談
- ◆インターネット洋書注文サービスパワーアップ
- ◆高齢者福祉事業の方向について
- ◆生協を知っていただくために

- 探訪 京都聴覚言語障害者福祉協会 16

●1999●APRIL●NO 38

発行 ● 京都府生活協同組合連合会

〒604-0851 京都市中京区烏丸夷川東南角 せいきょう会館2F
TEL.075-251-1551 FAX.075-251-1555



ネットワーク
NOW

共同作業所
第22回
全国大会の成功を

現在、障害者を取り巻く福祉の状況は国の「社会福祉基礎構造改革」の動きなど、1980年代から続く社会福祉における国家財政の削減と公的責任の後退の一連の動きとしてあらわれている。とりわけ「措置制度から契約制度への見直し」や「社会福祉への市場原理の導入」などが、一歩たりとも社会福祉における公的責任の後退にならないように、多くの国民が声を上げ、取り組みを進める必要がある。

このような中で開催される共作連第22回全国大会は、障害者福祉の転換期と重なる歴史的な時期の大会となる。そして「ともに協同し合う、助けあう精神」は協同組合と同じ立脚点に立っている。大会の成功を強く願っている。

年の瀬を迎え、生協に出荷する「しめなわ」づくりがいのちの村「栗の木寮」でおこなわれる。生協の組合員もボランティアで参加しおてつだい。

共同作業所第22回全国大会実行委員会委員長 **岩崎 彰之助**さん
同副委員長、京都府障害者共同作業所連絡会会長 **栗津 浩一**さん

どんなに障害が重くても、地域でふつうに働き、暮らしたい——そんな願いのもとに日本に共同作業所が産声をあげて約30年、豊かな福祉社会を築く地域の拠点として、共同作業所の存在はますます重要になっている。今年、京都で開催される共作連第22回全国大会（5月29日～30日）は、その到達点を確認し、さらなる発展を誓う場になるだろう。今回は大会準備に奔走されている岩崎さん、栗津さんのお2人をまじえ、生協との連携のあり方などを語り合った。

司会／尾松数憲（京都府生協連事務局長）

「支え合い、願いを実現する」は 共同作業所と生協の共通理念

司会 京都で開催される共作連

全国大会としては一一年前の
一一回大会に続いて、今回が

二回目です。一一年前の資料をみると、大
学・地域を含めた京都の生協が、大会成功
のために奮闘した熱気が伝わってきます。

今回の大会が、障害者の仲間たちが市民と
して豊かに暮らせる社会をめざすための大
きな力になるよう、京都の生協も力を尽く
したいと思います。まず、障害者の暮らし
の現状や作業所活動の取り組み、生協との
連携などについてお話しください。

栗津 共同作業所は障害者の共同の働く場
としてつくられ、多くは地方自治体の補助
金で運営されていますが小規模の無認可施
設も多く、まだ国の制度はありません。現

在、全国に五〇〇〇カ所以上あります。

名古屋に日本初の共同作業所ができた一
九六九年当時、障害者はなかなか就職でき
ない、就職しても労働条件や人間関係が厳
しくてなかなか続かないという状況でした。
そこで、働いて自立したいという障害者や
その家族、関係者の思いを集め、手弁当で
スタートしたのが共同作業所の始まりです。
京都では一九七五年、大宮町におみや共
同作業所ができ、二四年を経た現在、府内
一〇〇カ所を数えるまでになっています。

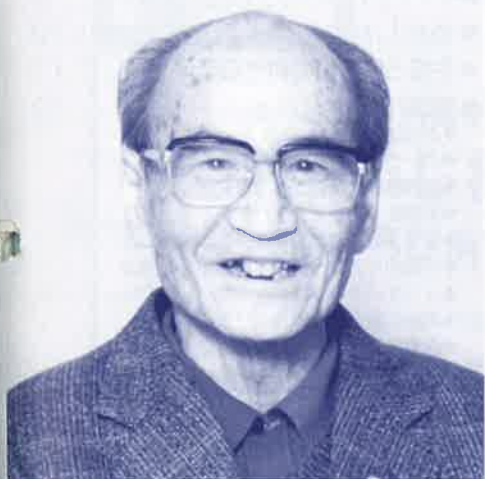
一一年前と比べると、障害者のための施
設は小規模のグループホームや入所施設な
ど、生活型施設が増えています。私たち共
同作業所の課題や取り組みも、単に働く場
の確保だけにとどまらず、障害者の生活や

人生をどう豊かにしていくのかという方向
へ大きく広がっています。

京都の生協のみなさんには一一年前、四
〇〇人を超えるボランティア協力をしてい
ただき、たいへんお世話になりました。あ
の大会をきっかけにして、作業所と地域の
組合員や市民のみなさんのふれあいの機会
が少しずつ増えてきました。

一方、国の社会福祉政策はいま、大きく
揺らいでいます。政府は基礎構造改革とい
う名のもとに、社会福祉に市場原理を導入
しようとしています。国が責任を持って福
祉サービスを提供する措置制度から個人の
自由な契約へと、福祉をめぐる環境は厳し
さをましています。私たちはこのような動
きに注意を払いながら、障害者の生活と権
利が一步も後退しないよう、幅広い市民の
みなさんとともに運動していきたいと考え
ています。

末川 生協との連携で言えば、一一年前の
大会を組織をあげてお手伝いしたのが、そ



京都府立高校、京都府教育委員会勤務の後、
1972年より京都府立聾学校長、後、99年まで
京都聴覚言語障害者福祉協会理事長
共同作業所第22回全国大会実行委員会委員長

岩崎 彰之助さん



アイアイハウス所長
京都府障害者共同作業所連絡会会長
共同作業所第22回全国大会実行委員会副委員長

栗津 浩一さん

生協と共同作業所の明日へ



茶店を月に一度開いたりしています。府北部では、お互いの顔が見える関係が比較的につきやすいです。

これらの活動を支えているのは各地域の組合員と作業所の日常的なお付き合いです。たとえば綾部の組合員・職員は、地元「いこいの村」でしめ縄づくりなど仕事のお手伝いをしたり、喫

の後の協同の取り組みのきっかけとなりました。お互いに支え合いながら自らの願いを実現する、これは共同作業所と生協の共通の理念ではないか——ということ、九〇年には協定書を結びました。さらに牛乳パックのリサイクル活動を通じて、個々の作業所と地域の生協組合員が直接ふれあう機会がふえて、少しずつお付き合いが深まっていきました。共作連の国会請願署名と募金にも毎年取り組んでいます。

吉田 一一年前は私もボランティアで参加しました。車いすの人を二人で担いで階段を上がったり。やはり、参加することが大事ですね。末川さんもお話しになりましたが、あの大会がきっかけになって、それぞれの地域での運動が広がっていきました。

ね。京都市内でも、北区の組合員と視覚障害者の作業所「アイアイハウス」はバザーやコンサートを協力して開いています。京都市内や乙訓地域は小規模作業所が多いこともあってか、日常的な関係がづくりにくい面があります。都市部でのお付き合いをどう積み重ねていくかが今後の課題だろうと思います。

協同の取り組みのもうひとつは事業提携です。生協の共同購入に作業所の製品を取り入れています。去年は、初めて乾燥こんにゃくが登場しました。最近のヘルシー志向もあって、組合員の評判は上々です。その他、葬祭事業で使う「お返しセット」の箱詰め作業などもお願いしています。

法内施設と共同作業所

法内施設とは国の法律にもとづいて設立された施設のこと。一般に認可施設と呼ばれ「精神薄弱者通所更生施設」「精神薄弱者通所授産施設」を指す場合が多い。これらは一八歳以上を対象に生活・作業指導、訓練を行っているが、施設が不足しており入所できない障害者と家族、関係者によって国の補助を受けない無認可の施設として自主的に開設されたのが共同作業所。

その後多くの自治体で補助制度ができたものの、各作業所の経営状態は厳しく、経営の安定化や設備の充実をはかるために、法人化して認可（法内）施設を目指すところが多い。

（かもがわブックレット「この街に生きて」から）



京都府生協連会長理事
共同作業所第22回全国大会実行委員会副委員長

吉田 智道さん



京都府生協連副会長理事
京都生協協同組合理事長

末川 千穂子さん



秋晴れの下、1万人の「元気」であふれました。

いま障害者運動・共作連運動の 原点を振り返る

司会 他の団体に共作連大会

への協力をお願いすると、

「共作連って何ですか？」と

いう質問が返ってきて、共作

連運動そのものについて、まだあまり知ら

れていないことを痛感します。そこであら

ためて、京都の障害者運動あるいは共作連

運動の歩みを、岩崎さんから振り返って

いただきます。

岩崎 京都の障害者運動の歴史を語るとき

大切になるのは、やはり戦後五〇年の歩み

を検証することだろうと思います。

私自身の歩みと重ね合わせてお話しさせ

ていただければ、敗戦は人生の大きな転換点

でした。戦争の罪責を考えることは、すな

わち戦後の生き方を考えることであり、結

果的には、教師として教育の民主化に取り

組む道へとつながっていきました。

たまたま教育委員会にいたとき、府立ろ

う学校高等部の生徒がストライキを打ち、

私はその対応にあたりました。生徒を尊厳

ある存在として扱わない古い教育に対して、

生徒たちは人間としての権利を訴えたので

す。これが私とろうあ者との出会いになり

ました。

後年、ろう学校に校長として赴くことに

なつたとき、ろうあ者とともに運動を進め、

ろうあ者のための教育をしようと決意しま

した。同時に、これは私の人生の最後のテ

ーマにもなりました。定年退職後、聴覚言

語障害センターをつくる運動に参加を請わ

れ、以後二〇年間、みなさんと一緒に歩ん

でいます。

聴覚言語センターが開所すると同時に、

重複聴覚障害者のための総合施設「いこい

の村」を綾部に建設する準備を始めました。

ろうあ者が人として生きる日々のつらさと

明日へのさまざまな願いを持ち寄り、周囲

の人びととの間に「全人としての交わり」

を持ち、深める場——これがどうしても必

要だと思ったのです。

八二歳のいま、ついに私も障害者になり

ました。人工肛門をつける身ですが、これ

も大事な出会いだと思っています。自分自

身がそういう苦しみと出会って、ほんとう

に主体化されました。私が障害者の方々の

一員にさせていただいたわけです。「障害か

ら学ぶ」とはこういうことなのだろうと思

います。

一方、京都の作業所の歴史は、与謝の海

“仲間”と呼びます

障害者もそこで働く職員も互いの人格

を尊重し、大人同士として育ちあい関係

を重視したいと考えています。それは障

害や発達の現状を正しく把握することの

大切さを前提としますが、そこだけに目

を奪われることで障害者の立場を低く見

がちになってしまう誤りに陥らないよう

にするためです。

それゆえに「先生—園生」といった上

下の関係で職員と障害者の関係をとらえ

るのではなく対等な関係を築くため、共

同作業所のなかでは障害者を「仲間」と

呼んでいるのです。

（かがわブックレット『この街に生きて』から）

養護学校を卒業した子どもたちの仕事場を

確保することから始まりました。それがお

おみや共同作業所です。町や村からやつと

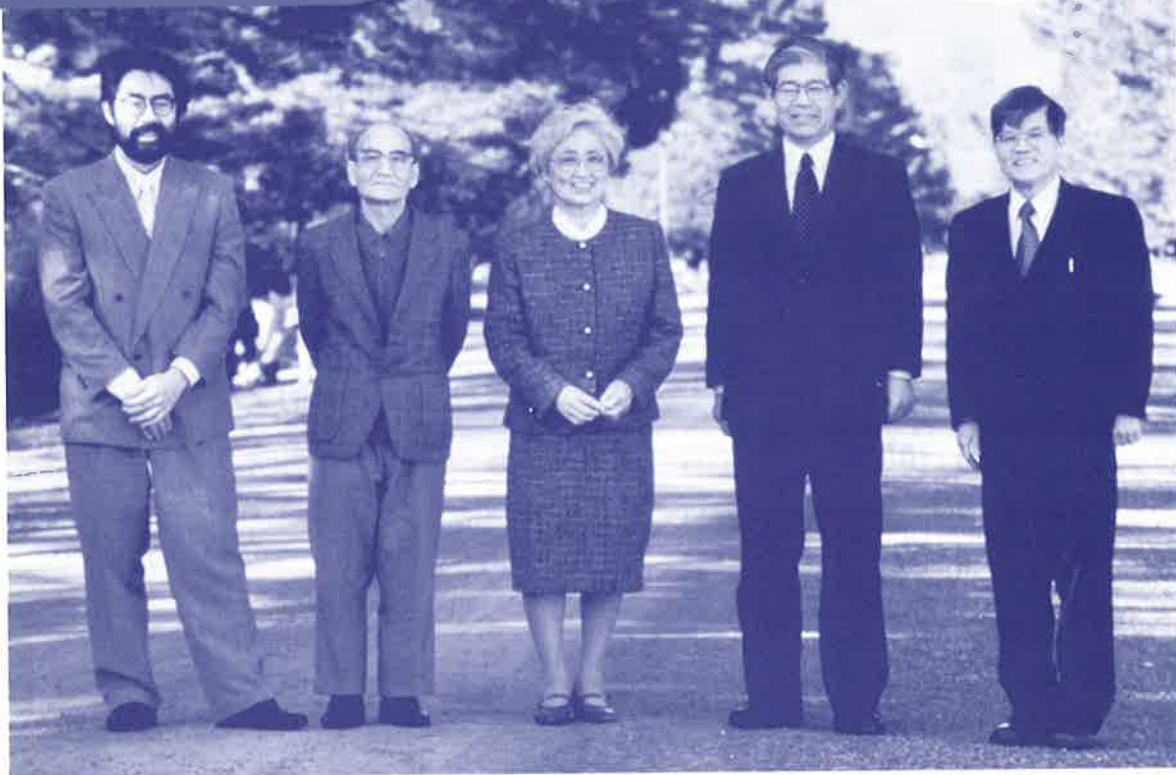
養護学校に入ったのに、卒業したら行き場

がない、働きたい、この子たちに働く場所

を——雪深い大宮町の村落共同体のなかで、

人としての人間らしい仕事の間、暮らした

場をめざして、人と人とが手をつないだの



です。それが共同作業所の出発点でした。
戦後の荒廃のなかで、これからは命を大切に
する世の中をつくりあげようとした人
びとの願い、未来を託すべきすべての子ど

もたちに学びと労働の場をという願い——
私はいま、この原点にもう一度立ち返り、
その意味を学ぶことが大切になっていると
思います。

「地域でふつうに暮らしたい」の 願いを地域のすみずみに

司会 岩崎さんの原点を私た
ちの原点としていきたいと思
います。その原点に立って、

今回の大会を考えたとき、今大会の意義は
どこにあるのでしょうか？

粟津 一十年前と違い、いま、全国の共同
作業所は五〇〇カ所以上あります。これ
は単に量的な変化ではなく、質的な前進だ
と考えています。共同作業所は無認可の施
設でありながら、この国の福祉においてす
でに重要な位置を占めているのです。今大
会はそういう到達点に立ち、人として大切
にされ豊かに生きたいという願いを実現さ
せる方向をさし示すものでなければなりま
せん。それが大会スローガン「ノーマライ
ゼーションを地域のすみずみに」の意味す
るところです。

いま、早くもその実践が各地で始まって
います。ボランティア参加の要請を受けた
生協組合員の間で「私たち主婦にとっても

住みやすい地域になること、それがノーマ
ライゼーションじゃないのかしら。障害の
ある人だけの問題ではないと思うわ」とい
うふうに語られ始めています。こういう積
み重ねを大切にして今度の大会を迎えるこ
とで、大会はふれあいと協同の輪をさらに
大きく広げる機会になるのではないかと思
っています。

また、とくに精神障害を持った人びとや
重度・重複障害を持った人びとに対する施
策はたいへん遅れています。病気が治って
社会生活を営むうえでほとんど問題のな
い人が、受け皿がないために病院から出ら
れない、いわば「社会的入院」とも言う
べきものが問題になっています。社会へ出
ていくために必要な訓練をする場所として、
作業所の役割はとても大きなものがありま
すし、地域の人びとの理解を得ていく役割
も負っています。大会ではそのことも訴え
たいですね。



組合員も手伝い、しめなわづくり

司会 映画「学校Ⅲ」でも、大竹しのぶさんの息子が自閉症という設定で描かれていますが、たしかに私たちは知的障害や精神障害についてよく理解できていないと思います。偏見を解いていくためにも日常のお付き合いできる場が必要で、この大会がその一助になってもっと理解が深まれば、と思います。

吉田 ノーマライゼーションは号令をかければ進む、と思うのは錯覚で、問題は「これが大事なんだ」と感じる人をそれぞれの地域でどれだけ育てていけるかだと思います。その意味では、この大会をきっかけにして地域・大学・医療の各生協でそういう人が増えていくことを期待したいし、それが今後の活動の発展につながっていくのだらうと思います。

末川 映画「どんぐりの家」の上映運動を生協で取り組んでいるうちに、左京では「これは作業所の人たちと一緒にやらないと

おかしいんじゃないの？」という声が出てきました。作業所の親の会の方々に「日曜日に上映会をするのでみにきてください」とお願いしたところ、「日曜日はとても映画をみに行くどころじゃないわ」と言われて、初めて「ああ、そういう状態なのか」とわかったんです。それが作業所の見学へとつながっていきました。

このように実際に行動するなかで、お母さんたちは「これは障害者だけの問題やない。私らの問題であり、私の子どもらのことなんや。みんなが住みやすい、ふつうに暮らしていける地域をつくるのが大事なんや」とわかってきました。今度の大会も、お互いの状況を学びあえる機会として生かせることができたらと思います。

吉田 とくに京都府生協連は他団体とのつながりの多さが特徴ですから、それを生かして、大会のことを多くの団体にお知らせしていきたいと思います。

生協の産直三原則が示す協同のかたち

司会 今後、どのように運動を進めていけばいいのでしょうか。

岩崎 私はいまこの時点で、京都生協が定

式化なさった「産直三原則」(注…生産者が明らかなこと、栽培方法が明確であること、生産者と消費者が交流できること)が大きな意味を持つてきていると思います。産直



「できた！」トマトの収穫作業

の場合、この野菜はだれが、どういうふうで育てたのかということ、買う人は知っていますね。同様に、「いいいの村」の「生産」と「消費」の過程を通じて、生協の組合員・職員と障害を持つて施設を運営してきた人たちの間に、「仲間」と呼べる世界が形成されつつあります。

吉田 「いいいの村」でピーマンをつくっていたいたときは、組合員は励ましとお礼のはがきを一生懸命書きました。

岩崎 あのはがきが届いたときはほんとうにうれしかったです。「おいしくて、子どもたちが取り合いしながら食べています」と書いてあったりしてね。あのときの、聴こえない人の喜びの大きさと深さは、聴こえ

生協と共同作業所の 共同作業所 明日へ



る者の想像をはるかに超えていました。私もあらためて、聴こえない人びとの「願い」を知る思いでした。産直によって、生産者と消費者が信頼関係で結ばれ、聴こえない人はその輪のなかに存在することで自らの生を確認するわけです。

吉田 私もそういう交流はとても大切だと思いますね。南部の店舗では、しめ縄づくりのために「いいこの村」の仲間に来てもらっています。職員も手話らしきものを駆

大都市にも人びとが集う 温もりのある共同体を

岩崎 このことはまた、古いはずの村落共同体が多様な可能性を秘めていることをも示

しているのではないかと思います。昔、お年寄りたちはおいしいものを持ち寄って観音講をしたりしました。「いいこの村」の仲間たちは、以前から上林村に住んでいる人びとと交流することによって、それを再現しているのではないかと思います。昔の話を知りたり、一緒に仕事をしたり、運動会で綱引きをしたり、そういう積み重ねのなかで共同体がつくられていくんです。いまでは、お寺のお坊さんがボランティアになってくれたり、村の人に『いいこの村』へ入りたい」と言われるようになりました。

使して(笑)、仲間と話し合っていますよ。

岩崎 これからの運動のあり方を考えるうえで、労働やモノづくりを通じた交流は大きなヒントです。「いいこの村」には重複・重度障害者のための施設のほかに上林村のお年寄りのための特養ホームもあるのですが、そこでは村のお年寄りが身振りで、耳の聴こえないお年寄りと一緒に仲良くやっています。モノをつくる者同士だから、声が介在しなくてもわかりあえるんですね。

古い村が新しい開かれた共同体になっていくわけですね。

大都市・京都もいま、そんな場所を必要としているのではないのでしょうか。人と人とのつながりが絶たれがちな都会で、共同体としての温かい営みを復活させることは、障害者や共作連にとって必要なだけではないと思います。障害のあるなしに関係なく、さまざま人びとが交流できる場所、それがいま求められているのではないのでしょうか。

生活のあり方、あるいは人と人とのつながり方、それは言い換えれば文化です。いまや福祉を権利としてだけではなく、文化としてとらえる視点が必要だし、これもこれからのノーマライゼーションのひとつの

かたちではないかと思っています。

そして、地域でノーマライゼーションを推し進めるためには、すでにある社会資源に対して働きかけていくことがとても有効だと思います。たとえば京都にたくさんあるお寺も、作業所と同様に、地域で「文化としての福祉」を推し進めていく場所になり得ると思うのですが、どうでしょうか。

司会 たしかに京都には宗教団体がたくさんありますし、呼びかける必要がありますね。栗津 いずれにしても、私たちの側がもっと積極的に働きかけていく必要があります。

生協との連携が一年前の大会をきっかけにして始まり、その後さまざまに発展しているように、今回も大会が終わってしまいはなく、取り組みのなかで蒔かれたノーマライゼーションの種が各地で育つことが大切です。具体的な課題で言えば、京都市内で少なくとも一つは社会福祉法人格を持った施設をつくりたい。そのことが府内全体の底上げにつながるでしょう。この大会をその契機にしなければと思っています。司会 きょうは単に障害者福祉にとどまらず、これからの社会のあり方を展望するような、貴重なお話を伺うことができました。大会を通じて、この思いをさらに多くの人びとに伝えたい、そのために京都の生協としても大いにがんばっていきたいと思います。どうもありがとうございました。

産直には魂の交流がある



京都府障害者共同作業所連絡会副会長
前いこの村・栗の木寮所長
梶合 稔

いこの村・栗の木寮が京都生協と産直契約を交わしたのは、開所二年目の一九八三年三月でした。これは、安心安全の野菜づくりが評価された全国でもめずらしい障害者施設と生協が手を結ぶ産直のスタートです。

私たちが最も大切にしたのは交流です。それは、聴覚言語障害があるために人としての権利を奪われてきた人たちが、いこの村で立派な生産者になっていることを、みんなに知ってもらいたい復権への願いと、自身にも実感してほしい主人公権への願いがあつたからです。

そこで、ピーマンや玉ネギの中にメッセージを入れて出荷しました。すると、生協組合員さんからたくさんのお便りが届きます。そこには「心のこもった味がしました」等のお褒めのことばが「暑さに負けずに。からだに気をつけて」とお気づかいの言葉で結ばれています。このことを毎月発行している通信「栗の木」に書いて、家族にも送りました。これを読んだ八十歳近いお母さんから「何のお役にも立てずにいた者（注：息子さん）が、少しでも世間の人に喜んで頂けると思うと嬉しさ一杯です」とのお便りが届きました。

一連の顛末を、京都生協新人職員研修でお話しました。送られてきた感想に「家族にまで安らぎを与えることを産直はやっている」「配達するとき、この一生懸命な心を伝えたい」と。

「産直には人間と人間の魂の交流があります」（八八年、南ブロック産直交流会実行委員長のあいさつより）。

八幡共同作業所のとりくみ



八幡共同作業所 運営委員長
天野 みどり

八幡共同作業所は一九八〇年、四名の仲間と職員一名で開所された。その後、保護者を中心に運動が広がり、認可施設「やわた作業所」（定員三〇名）が生まれた。一九八八年一月に、やわた作業所の定員三〇名から四〇名の定員増が認可されたのにもない、共同作業所は今までの地を離れて、八幡市から廃園になった保育園の提供を受けて、移転し六名で新たなスタートをした。四月には新しい仲間が四名入所の予定で里（重度障害者授産施設）の仲間も通所しています。

作業所運動も作業所まつりや後援会活動、行事を通じて市民に広がってきました。行政への要請活動も活発に行きます。作業所の建物（土地も含めて）は公設、民営の形を取って来ました。市補助金については府半費補助金の一〇％から二〇％への増額を実現しました。しかし共同作業所の運営は大変です。財源づくりは、八幡共同作業所、やわた作業所（認可）の三施設が共同して取り組みます。その主なものとして、ビッグバザーがあります。市民への物品提供のお願いのため、一戸一戸歩いてビラを全戸へ配布、回収、値付けと大変な労力を結集して行きます。二月に行われる木津川マラソン（三〇〇名参加）へ、モギ店を出店。ぜんざい、たこやき、わた菓子、前日からたて、キャベツをきざむ、小豆をたくなどの準備をして、材料道具をトラックに積み込みボランティア保護者、職員ら二〇名程で会場へ、午後四時頃までがんばって完売します。帰る車の中は今日一日の出来事や、どれだけ利益が上がったかなど話もあり上がり賑やかです。

後援会活動では年間を通じて会員拡大と会費集め、ニュース配布と、地域のみなさんに支えられて行っています。

親なきあとも自分の生まれた育った街で、みんなとふれ合いの中で生活を送ってほしい、これは保護者の願いです。そのために、グループホームや、入所施設がほしいという声が出ていますが、今は目の赤字補てんにおわっているのが現状です。

この子（仲間）たちにもっと「光」が当たる政策を望みます。

全国大会成功に向けて 京都の生協の取り組みについて

京都府生協連会長が副実行委員長の役割をになうことになったのをはじめ、生協関係者会議の開催など連絡調整をはかりながら、ひろく支援を呼びかけてきました。

各地で「どんぐりの家」の上映企画の準備がすすめられ、京都生協左京区行政区委員会が地域の障害者団体との交流をすすめるなかで共感の輪をひろげるなど、多くの経験が広がっています。

京都府生協連は大会成功に向けてつぎの取り組みをすすめています。

一、組合員組織を通じた広報、啓発活動
組合員組織のなかで共同作業所全国大会支援の課題についてよびかけ、共感の輪をひろげていく。

二、募金活動

大会財政は全体で三〇〇〇万円を上回る規模になっている。これを支える協賛金は一〇〇〇万円目標、寄付金は五六〇万円目標となっている。京都生協では組合員レベルまでとりくみの輪がひろがっている。

る。京都府生協連としては、京都生協で展開されている国会請願署名・募金もふくめて、協賛金・募金目標を五〇〇万円に設定し取り組む。

三、ボランティア組織について

これまでの経験をふまえ、ひろくボランティア登録をよびかける。京都生協では、独自にのべ三〇〇名のボランティアを目標にしてとりくみはじめています。京都の生協全体では、のべ四〇〇名のボランティア登録を目標によびかけを強めていく。

四、龍谷大学生協での食事、ドリンクサービス、パーティ対応について

大会分科会会場が龍谷大学であることから、龍谷大学生協にたいして全体実行委員会から食事、ドリンクサービス、パーティなどへの対応が要請されている。大学生協の連帯のなかで龍谷大学生協は、要請にこたえていく。



葬祭事業で使う「お返しセット」

共同作業所全国連絡会第二十二回全国大会

ホームライゼーションを
地域のすみずみに

生協と
共同作業所の
明日へ

大会の成功に向け
皆さんの募金をお
願いします。

[募金入金先]

銀行／京都銀行 吉祥院支店

普通3709425

共作連第22回全国大会 栗津浩一

郵便振替／01000-1-79565

共作連第22回全国大会



障害のある仲間たちの「ばくも働きたい」「わたしも友達がほしい」という願いにもとづいて、家族や関係者の運動を通じて各地域につくられてきたのが共同作業所です。そこでは障害のある仲間たちが主人公となって生き生きと働き、活動しています。共同作業所の数は全国で五〇〇〇カ所、京都でも一〇〇カ所に達し、今や法律にもとづく障害者施設の数をこえるまでになっています。

障害者を取り巻く福祉の状況は きびしい時代を

国における「社会福祉基礎構造改革」の動きは、一九八〇年代から続く社会福祉における国家財政の削減と公的責任の後退の一連の動きにつながるものと言えます。とりわけ「措置制度から契約制度への見直し」や「社会福祉への市場原理の導入」などが、一歩たりとも社会福祉における公的責任の後退にならないように、今まさに声を上げ、取り組みを進める必要があります。私たち共同作業所全国連絡会はその結成当時から小規模共同作業所問題の解決と本格的な制度化に向けて、国会請願署名をはじめ様々な運動を繰り返してきています。

このような中で開催される共作連第二十二回全国大会は、その準備機関が障害者福祉の激動期と重なる歴史的な時期の大会となります。二二年間で増え続けた量だけでなく質的にも新たな前進の大会でもあります。今大会では京都共作連だけでなく京都府生

協連や京都生協をはじめ障害者団体、労働組合など二七団体で実行委員会を結成し準備を進めています。それぞれの団体が障害者問題、共同作業所問題を自らの課題として受け止めて準備を進めています。

京都の障害者問題を広く府民、市民に知ってもらい、理解と支援として共感の輪をさらに広げていくことが共同作業所に通う仲間たちが安心して暮らしていることにつながります。そのような中で補助金制度や地域生活支援の施策が充実していく機会になればと考えています。また具体的な課題として、高騰する家賃や移転、長時間の送迎などの特別の困難を抱えた京都市内の共同作業所を社会福祉法人の認可施設にするという大きな運動も大会準備を通じて進めています。

大会の企画と成功に向けて

開会全体会は、京都の仲間たちが「共作連まつり」で取り組んできた「仲間太鼓」で開幕、総勢二二〇人の仲間たちによる「まつり花笠」でにぎやかに盛り上げます。記念講演は「障害者福祉におもうこと」と題してヤマト福祉財団理事長の小倉昌男氏にお話していただきます。特別分科会として「共同作業所と地域での共同を考える」分科会を設け、生協との共同の取り組みや地域の団体との取り組みなどの経験の交流ができればと考えています。

今大会には総勢二、五〇〇名の参加者を予定しています。障害のある仲間たちも七〇〇

名近く参加します。障害のある仲間たちの直接の介助はもちろん、大会を成功させるためには、二日間で一、〇〇〇名のボランティアさんの協力が必要です。参加費は一定額徴収するものの、大会成功のためには一、八〇〇万円の地元協賛金を集めなければなりません。一年前の第一一回京都集会では生協の皆様方から、四〇〇名をこえるボランティア協力と五〇〇万円をこえる募金のご協力をいただきました。大会を大きく成功させるために皆様方のご協力を心よりお願いいたします。

(京都共作連会長 栗津浩一)

全国からの仲間を
お待ちしております。
大会成功に向けて、貢献します。



龍谷大学生活協同組合
専務理事 小林 和美

昨春秋、京都・白河養護学校の進路指導の先生が来られて、生徒さんの社会教育として職場での研修を受け入れてもらえないかとのお話がありました。この二月に研修を受け入れ、無事終了することができました。その話を部内報に載せたところ、あるパートさんから「うちの子もこの春から養護学校に通うのです。ぜひ、これから研修を受け入れて下さい」とまた、私の大学の後輩も北陸の地で共同作業所をやっています。

そんなこんなで、私自身にとってもぐっと身近になった共同作業所の全国大会です。龍谷大学の中生協である私も龍大生協は、参加されるみなさんのお食事やドリンクの提供などを通じて大会の成功に幾分かでも貢献したいと思っています。

生協の地域授産促進事業の取り組み

わたしたちに、働く場をください

生協の物流センターで働く仲間達

知的障害者地域授産促進事業とは、

「働く意欲と能力を有しながら一般企業への就労の場を提供し、生きがいを与えようと同時に障害者の就労自立を援助しよう」という目的で京都生活協同組合のご協力のもとに南部物流センター（城陽市）で五年前から始まりました。現在十三名の仲間（私たちは通所者のことを仲間と呼んでいます）と四名の福祉会職員が働いています。

ここでは、京都府下全域に配達される共同購入の冷蔵、冷凍の商品を集品・箱詰めしています。仲間の仕事はその一番最初、保冷箱（発砲スチロールの箱）をベルトコンベアに乗せてい



今日もガンバリぞ

く事です。その保冷箱に機械で袋がかけられ、そこに商品が入れられていきます。ベルトコンベアに乗せるだけという単純な作業のようですが、なかなか大変です。保冷箱のシールをはがし、ぬれている物はひとつひとつ拭き、汚れている物はチェックして使える物は使う、そうでない物はあとでまとめて洗われます。集品数が多いとベルトコンベアの流れについていくだけで精いっぱいなのですが、そのうえ雨が降ると保冷箱がぬれていて作業がはかどりません。仲間の仕事が遅れると集品全体に迷惑をかけてしまいます。

仕事を通して心を開く

なかなか、他者との関わりを持ちにくい仲間も南部物流センターで働いています。この事業を始めたときは、他者との関わりをあまり持たずに、自分のエリアの中だけで、黙々と仕事をすると毎日が続いていました。しかし生協の職員をはじめとする多くの人々の朝のあいさつなどの声かけや仕事の上での関わりを通して、少しずつではあるが、本人も他者に対して心を開いてきました。

仕事を自分達のものとして成長

今では、「自分の働く場」として、きっちりと位置づいてきており、自分の方から他者に声かけをしたり、関わりを持ったという姿が多くみられるようになってきました。

また保冷箱の汚れや破損、ぬれなどを見てベルトコンベアに乗せるという、いくつかのこと

を同時にすることがむづかしい仲間がいます。はじめは、保冷箱の汚れや破損などに気が向くためにベルトコンベアに乗せることが遅れたり、ベルトコンベアに乗せることに気が向くために保冷箱の汚れや破損などに無とんちゃくになつてしまったりという失敗が多くみられました。でも、ひとつひとつの仕事をしつかりとクリアーさせていく中で、保冷箱の汚れや破損などを見てベルトコンベアに乗せるという、いくつかのことを同時にする力を獲得できています。

「キチッとやって」の声があればその声を、自分たちの問題なのだと思え、受けとめ、自分たちになり、その日の集品数により保冷箱の流す速さを変えなくてはという気持ちも生まれてきています。

事業の定着と拡大が希望

職場は夏は室温が三十八度という時もあり、また冬は凍るような寒さの中、みんな一生懸命仕事をしています。職員といえ、仲間のフォロー、むづかしい機械操作等で悪戦苦闘の毎日です。そんな中で、仲間は確実に力をつけてきています。毎日往復三時間の道のり、作業所とは違う職場の持つ雰囲気、たくさんの健常者の人たちとの関わり等、作業所では体験できない事が、仲間を少しずつ変えていきます。また、作業所では気にならなかった事が、一般社会に出ると大きな課題になるという事がわかり、職員も違う見方で仲間を見る事ができ、職員自身ももっと視野を広げないといけないと感じています。

「会社で働きたい」と思っているけれど、ひとりでは少し力が足りない仲間たちがまだまだたくさんいます。この事業を定着させ、拡大していく事は仲間たちの希望でもあり、そういう、いろんな意味で、この事業は本当に大切な取り組みです。

（福祉法人鳩ヶ峰福祉会 森井正明）

生協で働く仲間達へ 生協からメッセージ



京都生協
南部物流センター所長
石井 聡

南部物流センターで働く職員の中で、もっとも元氣な挨拶をしてくれる人たちが、それが、鳩ヶ峰福祉会の「なかま」です。作業場を通りかかる度に手を振って笑顔を交わし合う関係が続いています。

九九年度から個人別集品を始めるにあたって、機械の入れ替えを進めてきました。もちろん「なかま」の作業場の機械もしくみも変わります。

「なかま」の「個性」に対応する機械にするための検討・工夫が始まって、機械メーカーもそのことを理解し詳細にわたり、安全性や操作性について、指導員（なかまの声）の意見も汲み取りながら設計、見直しを繰り返し、ようやく完成、スタートを迎えます。この大不況の中、苦しい京都生協の経営状況の中で、「なかま」の「個性」を吸収し、「仕事の場」をつくり続けていくには、直面する矛盾とたたかう必要があります。

たとえば、実際の業務委託料は、京都生協グループのアルバイト職員でまかなった方が安上がりでできるなど。この問題を解決するためには、鳩ヶ峰福祉会の委託事業としての自立が重要なポイントとなります。このことは、今後の福祉分野の仕事を確認していく上での典型をつくる意味でも大切な意味をもっていると考えています。

九九年度は、京都生協からの作業フォロー（人件費投下）を必要としない自立化を目指すチャレンジの年としても新たな一歩を踏み出します。

「なかま」の社会参加・自立と、経営との両立、社会のしくみづくりに繋げる試みは、これからも続きます。

生協と 共同作業所の 明日へ

生協といこの村との 交流を通して

ともにつくり、語り、学び、
そして育てあい、地域を耕す
深い縁に発展

つくったキャベツはどいへ

「いこの村で作られたキャベツは、一旦京都市内にある物流センターにトラックで届けられます」

京都生協コープ福知山の農産担当職員の方の説明に、仲間たちは真剣な目で手話通訳している指導員の手に見入っています。

この一月いこの村栗の木寮の宣伝担当の仲間たちが、農産物の物流システムを学ぶために福知山の組合員センターを訪ねました。仲間たちが雪の中から収穫したキャベツを手にとって「新鮮ですね。物流センターからきたキャベツも「いこの村産」とちゃんと表示して店頭に並べているんですよ」との説明に農産班代表の仲間も感慨深げです。

いこの村栗の木寮は一九八二年（昭和五七年）、聴覚障害者と関係者が多くの市民や行政関係者の熱い支援を得て開設した重度身体障害者授産施設です。聴こえない上に、学校に行かせてもらえなかった未就学の仲間、知的障害や精神障害、視覚障害などの身体障害を併せ持つ仲間など現在五五人が「人として」豊かな労働や生活を目指して頑張っています。

「ピーマンを助けて」と苗代カンパ

造成した山肌を石ころ拾いから始まったいこの村の野菜作り。

「一般の家庭に障害者が作った野菜が並んで、『このピーマンおいしいね』『いこの村の仲間が育ててくれたんだよ』と障害者が働いている姿が食卓の話題になる姿が、食卓の文化だ」と声をかけて下さったのが京都生協でした。産直交流はこうして一九八三年三月に始まりました。

いこの村の地元綾部市口上林地域の皆さんのご厚意で休耕田をお借りし、ピーマンやカボチャ、キャベツ、玉ねぎなどを組合員の皆様に安心して召し上がっていただけるよう農業を殆ど使わず、有機農法など土壌改良の技術も取り入れながらつくっています。

一九八八年夏、私たちの経験不足と悪天候からピーマンが全滅。応援して下さいと皆さんに御迷惑をおかけしたにもかかわらず、「いこの村のピーマンを助けて」と苗代カンパをして下さいました。また、昨年九月の台風でビニールハウス二棟が

上林川の氾濫で押し流されて壊れ、キャベツやミニトマトが致命的な被害を受けたときも京都生協がいち早く支援カンパに取り組んで下さいました。

しめなわ交流とその後

京都生協といこの村の産直は農業ばかりではありません。

「今年もみんなで応援するから、しめなわをもっと作って！」

お正月のしめなわづくりは仲間たちと職員の方だけでは「これ以上生産できません」というギリギリの線まで来ているのですが、今では組合員さんが総出で飾り付けをてつだって頂いたり、年末の店頭販売では組合員センターを挙げて応援して下さいます。皆さんの熱いご支援に支えられて今年も売り上げ目標を超えて達成し、年度末ボーナスの支給もできました。

毎年のしめなわ交流会では仲間たちが「先生」になつて組合員さんが手に手をとってしめなわづくりを教えています。その自信に満ちた仲間たちの顔、はにかしように覚えてたの手話で自己紹介される組合員さんの顔、どちらも生き生きと輝いています。

このような交流から、綾部の組合員さんの手話サークル「ほのぼの」が生まれ、今では月二回の作業ボランティアの他に、手作りの喫茶店を開いて下さり、仲間たちも大喜びで、楽しい手話の花があちこちで咲いています。

この三月、綾部市内のデパート前で協同作業所全国連絡会の国会請願署名・募金活動に綾部協同作業所と一緒に取り組みました。その時も「ほのぼの」の皆さんが応援に駆けつけて下さいました。「ちょっと、そのみんな、障害者のみんなが頑張っている施設や作業所、応援して！」通りかかる中学生や家族連れに仲間と二人三脚で次々と声をかけて、見る見るうちに署名・募金が集まりました。

産直は「交流の魂」

このように生協といこの村との交流は単に「作る・売る」「買う・食べる」という関係から、「共に作り、語り、学び、そして育ちあい、地域を耕す」という深い絆に発展していています。

「介護保険」に見るように「障害」を重さで量られ、サービスに値段がつけられる時代に仲間たちと生協の皆さんとの協同作業は、まさしく「魂の交流」として輝いています。

（いこの村栗の木寮 指導係主任 村松 充）

私達も仲間とともに



手話サークル ほのぼの代表

萩野 洋子

手話サークル「ほのぼの」が誕生して六月で丸三年になります。

誕生するまでにはいろいろなハードルをクリアしてきました。

いこの村の栗の木での毎月二回のボランティア!!もうすっかり行き慣れているのに行く日はなぜかウキウキ!ワクワク!「今日はどんな事あるかな?」「仲間と何話そうかな?」とか本当に楽しみです。

又仲間との署名活動!!二月十八日雨が降つてとても寒い日、若宮神社で傘をさしての活動、仲間はぬれても一生懸命頭を下げてお願いします。私も知っている人をお願いしました。組合員さんにもお願いしました。その組合員さんが戻って来られ「寒いのに大変やね!これ食べてあったまて!!」と言っていた焼きを渡してくれました。思わず胸が熱くなり涙しました。

又、今年七月で丸二年になる「ほのぼの喫茶」も仲間がとても楽しみにしてくるようになり、月一回ですが私達と仲間の大切な交流の場となっています。

京都生協との交流といえば仲間が特に頑張っている「しめなわ作り」があります。今年も仲間と職員が輪になって一本縄の水引を付けていました。慣れないのに一生懸命しているのを見て仲間は嬉しそうでした。

又、職員も仲間の仕事の大変さを体験することができ、お互いに理解し合えた大切な交流会になったと思います。

これからも楽しみながらボランティア活動をして行きたいと思っています。

農業の担い手女性の地位向上を 生協との交流を大切にしたい

J A 京都女性協と懇談

連合生協 京都府
女性役員

懇談会が二月一五日、日吉町「スプリングひよし」で開かれ、J A 京都・女性協の役員一

名、生協から女性役員二名が参加しました。J A 日吉町の加工場見学の後、J A 日吉町生活部の小林艶子次長から「地域起こし、安全な食品づくりをめざした黒豆生産・加工」の報告を聞きました。

京都府生協連副会長・京都生協理事長末川千



両組織の交流が広がる

穂子さんのあいさつの後、J A 京都女性協会長の渡辺有さんから「女性協は、各農協女性部によって構成されている、高齢化の進行と、若い人の減少のなかで、この一〇年で三分の二にまで減り、活性化をめざして、魅力ある活動づくり、グループリーダーの育成をしています。農協も男社会であり、女性理事は少なく、ふやそうとしているところです。健康・暮らしを向上させるとともに、農業の担い手として公の場でものを言えるよう、女性の地位向上につとめています。

生協、農協も生産と消費の違いはありますが「安全で品質の良い食品を」という原点は同じです。理解と交流を深め、ともに活動を広げましょう」とあいさつ。

生協からは「意欲ある農産加工の話聞いてよかった」、「生協でも地域産品の普及を広げているが、農協と協同でもっとできることはないか」「府北部では消費者であると同時に生産者という生協組合員が多い。規格外の産品利用も含め、消費と地域生産を結びつけていきたい」「福祉分野での交流をしたい」などの意見が出されました。

末川副会長から「生協と農協の相互理解が広がる機会を持てて本当に良かった。これを出発点にして懇談・交流をすすめていくことにしましょう」とまとめのあいさつがおこなわれ閉会しました。

ホームヘルパー2級講座修了式

三月二四日、京都生協主催、京都府生協連後援で進められてきた第一回ホームヘルパー2級講座の修了式が開かれました。



「やった！」感激の修了証をうけとる

京都生協では組合員福祉事業活動の中で地域住民どうしによる「共助」の取り組みをすすめてきました。広がった「助け合いの会」での日常生活の援助活動や、老人世帯などへの配食の取り組み、居住者にやさしいコープ仕様の住居開発など、組合員の暮らしに根ざした取り組みが進んできました。

二〇〇〇年介護保険施行前年の今年、法に基づく指定事業ともなる、専門知識を必要とする介護事業分野での取り組みを展開していくための準備をすすめています。組合員の介護分野も含めた生活支援を幅広くするために、一月二日より京都府の認可を受けた第一回ホームヘルパー2級養成講座を開講してきました。

受講者四一人（女性三九人、男性二人）は、全員が無事終了しました。修了式では、京都府立大学上掛利博先生の講演「生協の福祉活動に求められるもの」につづき、末川理事長より一人ひとりに修了証がわたされました。

講座修了者は今後、九九年七月より開始予定の京都生協ホームヘルパー事業や地域での活躍が期待されます。

訪問看護ステーションを開設

地域にねざした医療、健康、福祉の取り組みを進めている、やましろ健康医療生協は、今後の介護保険に対応した地域医療活動の拠点として訪問看護ステーションの開設を準備し、宇治市と協議をおこなってきました。

この度、宇治市の同意を得て当生協では、宇治市大久保地区に七月の開設を目標に開設準備に入りました。

看護婦三人体制で業務をすすめる予定です。

今後、介護保険制度のもとで、より高齢者にやさしい地域医療、訪問看護と一緒にあったホームヘルパー事業など在宅医療、福祉事業をすすめる上で新たな拠点として期待されます。

やましろ健康
医療生協

新個配「こっこ便」がスタート

個人別に仕分けし組合員宅にお届け 障害者、高齢者には配達料金の割引

京都生協

京都生協は、組合員の声に応え、より暮らしに役立ち、誰もが参加できる改革をすすめてきました。この中の共同購入事業改革の一環として、個人別仕分けシステムと、CNS（生協グループの物流子会社）委託による新しい宅配——こっこ便事業が九九年より開始します。

一九九八年から二〇〇〇年度にいたる中期計画に先立って実施した京都府民アンケートでは共同購入への改善要望として、お届け時仕分けの手段、仕分け中の冷蔵・冷凍商品温度管理の



青空健康チェック風景

乙訓医療生協は、九八年度、班づくり・支部づくりの活動を中心に運動をすすめてきました。向日市の四つの小学校区と西京区で支部が誕生し、支部づくりをきっかけに十五の新しい班とサークルができました。「ゲタはきで気軽に出かけられる地域の単位に班をつくらう」「今まで『青い空』（ニュース）はポストに入れるだけだったけど、ひと声かけて配ります」「お年寄

いつまでもいの町に住みづげたい

不安、配達時間延長や、購入商品に関するプライバシー、あるいはお年寄りや障害をもつ人から商品の戸口へのお届けなど、個人別仕分け及び宅配に関する声が多くの人から寄せられました。この声を受け、暮らしに役立ち、誰もが参加できる事業をめざす改革の一環として、個人別仕分けを三月三週より冷蔵商品、三月四週より冷凍商品の個人別仕分けを開始、また、四月三週より新しい宅配（こっこ便）事業を開始することにしたのです。

個人別仕分けは、生協の物流センターで個人

別に袋詰めにして届けられます。これにより、お届け後にその場で商品を広げて仕分けする手間と時間が必要なくなり、商品の品温管理改善と、仕分け時のプライバシーが守られることも期待できます。

こっこ便事業ではキャンパス（共同購入商品案内）掲載の商品を利用するための「班」を前提としない個人登録、戸口配達で、一人でも利用できるようにあります。グループ会社への委託で組合員とのコミュニケーションもこれまで通り大切にします。

また、こっこ便一回配達手数料は四〇〇円ですがお年寄り、障害者などのくらし支援として割引制度（二〇〇円）も実施されます。九九年事業計画として、登録人数四五〇人以上、供給高で一〇億円を計画しています。

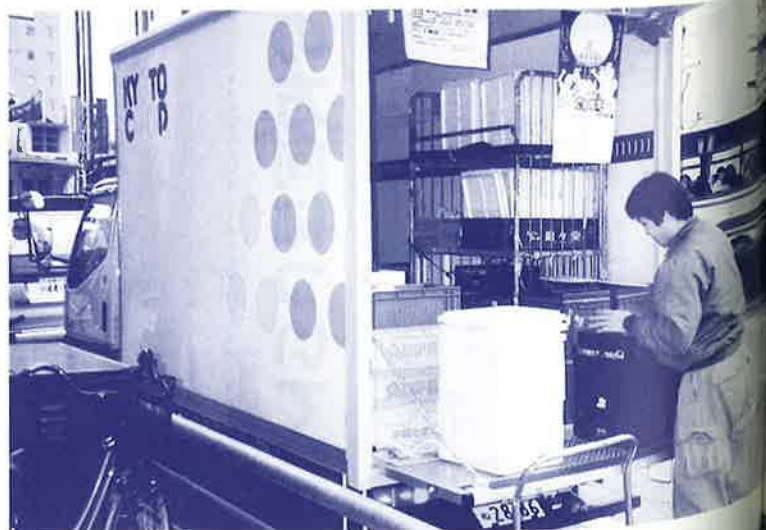
りの人への声かけをやっていききたい」など、人がつながり協同して生きていくことの大切さや、介護問題、医療・年金問題の学習を通して、誰もが持っている「いつまでも安心してこの町に住みづげたい」という願いの実現のためには、医療生協が今よりもっと大きくならなければ……ということが明らかになりました。一人一人の組合員の願いを集めて、支部や班がもっと元気にとの取り組みが進んでいます。

一方、医療生協がすすめる健康づくりの活動をもっと地域の人に知ってもらいたいと取り組んだ「青空健康チェック」は好評でした。特にコップむこうしでの店頭健康チェックには長い

列ができました。血圧と体脂肪の簡単な健康チェックですが「この前チェックしたら体脂肪が多かったし、あれから心がけて歩くようにしています」などの話を聞くと「定期的にやっつけていてよかった、これからも健康チェックをあちこちでやりたい。健康づくりの運動を広げたい。」という思いが広がります。

組合員一人一人が主人公になる取り組みはまだ十分ですが、支部を基礎に班を単位にして、医療生協の活動を広げていきたいとがんばっています。

乙訓
医療生協



「組合員を大切に」と北支部湯浅さん

京都のマスコミ関係者・月曜会と懇談

不況の中で生協はどんな努力を

三月三日、コブイン京都で開かれました。

京都のマスコミ関係者（月曜会）から京都新聞社編集局長・松永賢三、朝日新聞社京都支社長・河原 宏、読売新聞社京都

総局長・中島 広、日本経済新聞社京都支社長・池田俊作、日本経済新聞社京都支局長・中村 良、産経新聞社京都支局長・富永 一、中日新聞社京都支局長・茂原基三、共同通信社京都支局長・宮永民男、時事通信社京都支局長・



京都生協の活動を門協専務が報告

若林清造、NHK京都放送局長・高月嘉彦、NHK京都放送局放送部長・原田隆司、KBS京都報道局長・深井 勉さんらが参加。

京都府生協連からは吉田会長、末川副会長（京都生協理事長）ら六名の役職員が参加しました。

府連
都協
京生

懇談会では、京都の地域、医療、大学などの生協活動をそれぞれ紹介し、意見交換がされました。マスコミ関係者からは、「店舗と共同購入の事業内容」「商品の安心、安全の追求と価格は、あい反するのではないか。どのように考え、進めているのか」「二一世紀、どのような店舗展開の計画をもっているのか」「遺伝子組換え食品の考え方を聞きたい」「ドイツと日本のゴミの違いには驚いている。ドイツのスーパーではゴミを出さない工夫や「ばら売り」等が取り組まれている。ゴミを減らす取り組みはどのようにされているのか」「介護保険が実施される中で、生協の計画、メニュー、他企業との違いは」「地域振興券の消費者への刺激、消費影響はどう見ているのか」「生協店舗の商品、価格に魅力がない。SM、百貨店は厳しく、コンビニにも既存店は横ばいだ。一〇〇円ショップは調子が良い。不況の中で、生協はどのような努力をしているのか」「環境問題で他のスーパーとの違いは何か」「二条駅前の開発では、生協店舗の計画はどのようになっているのか」「学生生活の実態調査はおもしろい内容だ。発表はされているのか」等がだされ、活発な意見交換と懇談がおこなわれました。

インターネット洋書注文サービス パワーアップ

組合員の声にこたえて、京都、大阪、神戸、中国、四国、九州の各事業連合、各大学生協は、インターネット洋書注文サービス事業（輸入専門会社・COPを九七年アメリカに設立）のシステム改善、改革に取り組んできましたが、パワーアップした新システムを完成させ、一月六日よりスタートさせました。

データベース、サーバーの能力アップ等の

まけると、和書検索注文サービスへ直接ログインできるようにしました。

洋書では、研究分類に強い二一八万以上のデータベースをもつて、常時三九万件以上在庫をしています。週一回、航空便でアメリカから発送し、早ければ二週間前後で生協店舗に届きます。和書では約三〇万冊の取り扱いアイテムになっています。

高齢者福祉事業の方向について

生協の「高齢者福祉事業の方向について」議論、政策検討進む

京都府生協連は二〇〇〇年四月からの介護保険制度実施にともない、今後の生協の福祉事業政策のあり方を考える「福祉事業政策研究会」を九八年一月発足させ、学習会、視察研修などをおこない、福祉事業の方向について政策検討を進めてきました。

高齢者が「生きていてよかった」「毎日がたのしい」といえる地域や社会的環境、システムをどう実現し、高齢者の自立や生活支援をベースにおきながら、介護が必要となった人々に対して、京都の生協グループ、諸団体との協同、連帯の力をあわせてどのような福

京大生協連
都事業合

祉事業が可能なのか、その方向について検討されています。

検討の中では、つぎのような課題があげられています。

①学習活動を広げ、国や地方自治体に対して国民一人一人を大切にした福祉制度の実現を求め、行政施策への積極的な提言や、参加を進めていく。

②生協の「福祉情報相談助言コーナー」機能を強め、暮らし、食事と栄養、健康管理、眼の健康アドバイス、料理教室の開催、地

域のネットワーク、情報提供を強める。

③高齢者、一人一人の暮らしにあった商品開発や品揃えの強化、個配事業の高齢者対応の実施。

高齢者向け生活支援・配食弁当サービス事業の強化。

④介護保険のもとで「事業者」として福祉器具の供給、貸与、高齢者用住宅改良事業、ホームヘルパー派遣等、在宅介護サービス事業を準備していく。

⑤助け合い活動を強めながら必要な在宅介護

をおこなうホームヘルパー派遣事業をおこなう。

⑥医療生協での訪問看護ステーションとホームヘルプステーションの設置を進める。

⑦これらの事業化のために二級ヘルパー養成、ケアマネージャーの人材養成、資格取得者養成をはかる。

⑧病院・医療機関、医療生協と地域生協などのネットワークの確立を進める。

⑨京都府生協連は情報、連携ネットワーク機能としての役割をはたす。

生協を知っていただくために

行政や京都府議会運営委員の皆さんとの懇談会を開催

生協法五十年事業の取り組みとして、京都の生協活動をご理解いただき、ご意見をいただく場として行政、政党関係者、諸団体との懇談会が進んでいます。

京田辺市、八幡市、京都府峰山、宮津の振興局、宮津市、福知山市、向日市などの懇談会が開かれました。

福知山市では、高日音彦助役、田中企画部長、谷口環境対策室長、岩城市民部管理課長さんらに参加をいただきました。

高日助役より、「生協法五十年、厚生大臣表彰受賞おめでとうございませう。生協が阪神、淡路大震災で活躍され、災害などで京都府との関係をつよめられ、福知山でおこなわれた京都府防災訓練で活躍された。環

境にやさしい取り組みなどを意欲的に進められていることなど」に敬意を表しますとのあいさつがあり、分別回収の取り組み、店舗でのトレイ、買い物袋の取り組み、介護保険に向けての取り組み、助け合い活動、食品の安全問題など多岐にわたって意見交換がされました。

向日市では、澤企画財政部長、矢崎高齢福祉課長、酒井主幹らが参加。地元乙訓の小林さんが京都生協の乙訓行政区活動について報告し行政への要望をしました。乙訓医療生協の大関事務局長が医療生協の事業や医療、健康活動について報告しました。行政と生協の関係、環境、省資源、福祉等パートナーシップの必要性等意見交換されました。

府議会運営委員理事者の皆さんと懇談
京都府議会運営委員会、自民党理事者との懇談会が十二月九日開かれました。小牧誠一

郎、田坂幾太、西田昌司、酒井国生の各議員の参加をいただきました。京都府生協連からは、吉田会長、末川副会長（京都生協理事長）、門脇京都生協専務理事、岡田京都府庁生協理事長らが参加しました。

吉田会長から「生協法が五十年を迎えたこと、厚生大臣表彰を受けたこと、この間の京都府との関係強化の取り組み、京都の生協活動の現状」等を報告。

自民党を代表して小牧議員から「はじめてこのような場がもてた。今日を機会に生協さんと理解し合える仲になれば嬉しい」とあいさつがあり、地域の商工業者、住民との連携や共生、生協と政治活動の関係（生協法と政治的中立）、生協法の主旨にもとづいた、運営の透明性の確保、役員構成等多岐にわたって意見交換されました。

二月二十四日には、共産党理事者との懇談会が開かれ、松尾孝、岩田隆夫、高橋昭三、新井進の各議員の参加をいただきました。

消費者行政の推進、食品安全行政の進め方、ダイオキシン対策、介護保険、都市と農村の交流事業のあり方、生協活動への助成金、各種審議会への参加、生ゴミなどのリサイクルなど多岐にわたって意見交換されました。



向日市との懇談会

探訪

社会福祉法人

京都聴覚言語障害者福祉協会



京都市聴覚言語障害センター・若木寮

(入所・定員30名)

身体障害者手帳の交付を受け付けている18歳以上の聴覚および言語に障害を持つ方々を対象に、施設入所して職業訓練や生活訓練を行い、企業就労および社会的自立が実現できるよう指導・援助。



京都市西ノ京障害者授産所・青空工房

(通所・定員20名)

身体障害者手帳を有し、企業就労が難しく生活に困窮する方々を対象に、必要な作業等を提供し、就労や社会的自立をめざす通所の施設です。当施設は、聴覚障害者に対する専門の機能を併せもっています。



京都市聴覚言語障害センター

【手話通訳・生活相談】

聴覚障害者が、その障害の故に不利益を受けることのないように、手話通訳者を派遣し、コミュニケーションの保障を行います。また、手話講座を開催し、啓発及び手話通訳者を養成します。聴覚障害者の日常生活上の種々の問題についての相談も受け付けています。



【聴覚言語検査・訓練・要約筆記者派遣】

- ①検査・相談／難聴や吃音など「きこえ」や「ことば」に関する相談を受けとめ、検査・診断を行い、補聴器に関するアドバイスや難聴者のための教室をおこなっています。
- ②要約筆記者の派遣／難聴者が、その障害の故に不利益を受けることのないよう要約筆記者を派遣することにより、コミュニケーションの保障をおこなっています。

【ビデオライブラリー】

聴覚言語障害者の情報の保障・文化の向上のため、聴覚障害に関するビデオテープの作成、既成テープへの字幕・手話の購入を行います。これらのビデオはライブラリーとしても貸し出しており、自主制作品については実費配布も行っています。また、ビデオ機器の貸し出しもおこなっています。

●ビデオ貸し出しの申し込み

直接来所していただくことを原則としていますが、遠隔地の場合は電話または文書申し込みも受け付けています。

(月・水・金／午前9時～午後9時30分) (火・木／午前9時～午後5時) ※土日と火・木の夜間は、返却と予約(翌日郵送扱い)のみ受け付けます。なお、貸し出しは無料です。

GUIDE

社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会

〒604-8437 京都市中京区西ノ京東中合町2 TEL.075-841-8331 FAX.075-803-2992